

- 文科省関連予算の報告、第5回までの議論の振り返り、今後の議論の進め方案の説明、GXに関する俯瞰的話題提供を行った後に、総合討論
- 総合討論における主なポイント：
 - TRLが低くまだ企業がコミットや経営判断をできないところなど、アカデミアが貢献できる領域の議論が重要。
 - 各技術が持つ社会的な価値や法的な観点も踏まえ、注力すべき技術領域を探索することが重要。
 - 若手同士が密に議論をして、研究テーマを議論できるような場があるとよい。
 - シナリオ分析や技術経済分析ができる人材や、横断的に新規技術の応用先を考えられる人材の育成も必要。
 - GteXの運用において、人材の流動実績も評価軸とすることや、産と学とが常に会話をすることも重要。

<我が国が戦略的に注力すべき技術領域について>

- 0を1にするような革新技術を生み出すところは文部科学省、1を100、1,000、万に発展させるところは経産省や環境省など、役割分担を検討した上で、アカデミアが貢献できる領域・分野・研究テーマが何なのかを議論することも大切。特にTRLが低くまだ企業がコミットや経営判断をできないところで芽を生み出すことが、アカデミアが取り組むべき領域ではないか。
- 脱炭素だけでなく、希少鉱物資源管理、エネルギー安全保障、経済安全保障といった観点から、各技術が持つ社会的な価値を定量的・定性的に評価した上で、注力すべき技術領域を探索することが重要。
- 要素技術の導入によりどのような社会的価値・社会科学的インパクトを生み出すのかといった、ソフトな研究開発にも力を入れていくことが必要。
- 社会実装した際の価値軸が重要であり、社会実装的な視点と法的な視点も含めて、バランスの取れた研究開発テーマが望ましい。
- 資源や資金等が限られる中で、どのように集中化・分散化していくかが重要であり、若手研究者や企業の若手も含めたワーキンググループなどをつくって議論することが必要。

<成果を最大化する研究開発マネジメントについて>

- ヨーロッパ等では、マネジメント手法を開発するようなプロジェクトも立ち上げて伴走させているケースもあり、研究開発マネジメントにおいて参考にすべき。

<GXを支える人材を育成する仕組みについて>

- 次の人材を育てるためには、若い研究者が元気に活動している姿を見せることが大切。受け身の人材ではなく、自分から考えて行動するような人材を育ててほしい。
- 若手は閉塞感を感じていると聞く。若手同士の交流の機会を増やし、そこから意見を拾い上げるとよい。若手が密に議論をして、研究テーマを提案するような場があるとよい。
- 博士課程学生が企業に行って研究する、企業の研究人材が大学に来て研究するなど、人材の流動性を確保し、大学と企業がよりオープン・ダイナミックに一緒になって研究開発する仕組みが必要。
- シナリオ分析や技術経済分析ができる人材を育てるとともに、そのような方向性に進むことをたたえるような仕組みづくりも必要。
- 創出された成果が、当初想定していた分野とは異なる分野の社会課題解決において有用となる場合がある。横断的にいろいろなプロジェクトの新規技術の応用先を考えられる人材を育てることも必要。

<GteX事業の推進の方向性について>

- GteXの運用において、具体的な研究開発成果はもちろんのこと、博士人材の輩出や人材の流動実績も評価軸とするとういのではないか。
- 産と学とが常に会話をすることが非常に重要。GteXにおいても、産から若手が入り込み、双方の強みとやり方を知ると、次の連携がうまくいくと思われる。人材育成も兼ねて、適切に運用してほしい。
- 海外も、連携できるところはうまく連携するとよい。この会議でも海外の状況報告の機会があればうれしい。